

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2014～2016

課題番号：26300024

研究課題名(和文) 古代・中世東西回廊 - ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態

研究課題名(英文) Ancient East-West Corridor - Historical Dynamics on Communication Network in Myanmar and Thai Cross-Border

研究代表者

柴山 守 (Shibayama, Mamoru)

京都大学・学内共同利用施設等・研究員

研究者番号：10162645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、4世紀から18世紀に至る大陸部東南アジアの古代都市群と都市間の主に交易や宗教の伝播、統治を対象にした文化交流網と時代ごとの歴史的動態を明らかにしたことである。とくに、ドヴァラヴァティーからアンコール、スコタイ、アユタヤに至る各時代を通じて総延長2千キロメートルに達する歴史回廊が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Study on ancient East-West Corridor explores the mystery of the historical dynamics on regional land-based communication network between ancient cities from the 4th to 18th centuries with transition to and from each era. As well as the cultural exchange and impact focusing on the economic exchange and trade, the rule, and the religion in ancient cities and between cities in mainland Southeast Asia are to be emerged. This research, the EWCC (East-West Cultural Corridor) project, has conducted multi-layered GIS analyses from the perspective of historical view points and geographical spaces, including evidences obtained by field surveys, and based on previous studies and newly obtained archaeological site's data from approximately 16,000 places in Myanmar, Thailand and the Khmer archaeological sites. As a result, a historical corridor that reaches total length of around 2,000 kilometers emerged throughout each era from Dvaravati to Angkor, Sukhothai, and Ayutthaya.

研究分野：地域情報学

キーワード：東南アジア史 東南アジア考古学 ドヴァラヴァティー GIS

1. 研究開始当初の背景

「東西回廊」説は、13～15世紀スコータイ期におけるマルタバン（ミャンマー）からスコータイ（タイ）に至る交易や仏教伝播のルートとして、石井米雄により初めて論じられた（引用文献①）。石井による同説は、スコータイからアンコール遺跡群を中心とした王道研究（Royal Road）に繋がり、メコンデルタに至る交易ルートとしての可能性に言及した。石井が示したルートは、石井説より数世紀溯った9世紀には、すでに本ルートが存在していた。さらに本ルートがタイ側のモン族やスワブミー（黄金の知）地域の存在、クメールの影響とも関係したルートであった、ことがミャンマー側のモン族タトーン地域における遺跡発掘調査で判明している（引用文献②）。また、古代都市群としての6～11世紀ドヴァーラヴァティー期における遺跡群と遺物に関する研究は、新田らにより進められ、タイ国内においては、すでに対外・域内交易が存在していたことが判明している（引用文献③④）。これらの研究は、いずれもミャンマーないしはタイ側からの個別的なアプローチであり、ミャンマーの近年の状況も踏まえ、双方の調査・研究を相関させることで、さらに統治・宗教・交易の関係ネットワークが浮き彫りになると考えられる。

本研究代表者とLARPプロジェクトとの共同研究で平成24年度から平成25年度まで実施した「東西文化回廊」研究では、(1)『ビルマにおける古代遺跡一覧』（引用文献⑤）、(2)タイ芸術局タイ全土遺跡リスト（引用文献⑥）、(3)第二次大戦時軍事関連資料、(4)英領ビルマ当時の民族学的調査記録などの入手とGIS（地理情報システム）分析の結果から、いくつかの仮説が浮上すると共に、アンコールから王道を越えたタイ国内、さらに西のミャンマーへのびる歴史的「東西回廊」の分析が可能となった。

それらの研究成果から、(1)これまでの学術的研究の経過、(2)遺跡目録群のGIS分析による新たな仮説、そして(3)最近、調査が可能になったミャンマーの状況を踏まえて、これまで謎に包まれ、未解明であったミャンマー沿岸地域からタイ内陸へ至る跨境を中心とした回廊の臨地調査を着想するに至った。

以上のような背景と経緯のなかで、古代から近世に至る東南アジア大陸部の統治・宗教・交易ネットワークの歴史的動態についての解明を目指すことにした。

2. 研究の目的

本研究は、東南アジア大陸部のミャンマーからタイ、カンボジアに至る古代・中世の「東西回廊」という視点から、特に6世紀から18世紀に至るミャンマー・タイ跨境の古代都市群とそれらの都市間の文化交流・交易ネットワークの歴史的動態について考究するのが目的である。具体的には、ミャンマー沿岸部とタイ・チャオプラヤー流域の地域間にお

る関係、およびアンコール期における王道とミャンマー・タイ跨境の関係を既知の考古発掘調査資料や文献、GIS（地理情報システム）分析から得られた仮説にもとづいて臨地調査を行う。臨地調査にもとづいて、遺構・遺物群や地形的特徴の把握から時代毎に推移する「東西回廊」の推定と歴史的動態の解明を試みる。本研究は、統治（政治）・宗教・交易（経済）で説明される古代都市とその関係ネットワークの歴史的動態に着目して、これまでの仮説を検証し、展開させる実証的研究である。

3. 研究の方法

本研究は、ミャンマー・タイ間の東西回廊を示す地域の陸路による臨地調査をベースにして、考古発掘資料や文献調査、GIS・リモートセンシング技術などの援用による研究である。本研究では、これまでの”List of Ancient Monuments in Burma.1916”（約430件）、および『タイ全土遺跡リスト』（約7,400箇所）のGIS分析（引用文献⑥）や文献による研究にもとづいて、調査の対象をミャンマー・タイ跨境/民族越境地域を経由する3つのルート、およびそれらと関連する主に6世紀以降の古代都市群に設定する。具体的には、ミャンマー・タイ跨境/民族越境地域における①ダウエイ－カンチャナブリ県ルート、②モールメイン－メーソットのルート、③メルギーテナセリウム－モダン峠を経由してタイ湾へ抜ける3つのルート、およびモン族の古代都市遺跡群、クメール/スコータイ/アユタヤ期の古代都市群とミャンマー側の沿岸域古代遺跡群における遺跡・遺物の類似性等の特徴、古代道路網などの実態を把握し、マッピング作業を行う。

4. 研究成果

(1)ミャンマーおよびタイにおける遺跡分布の時空間分析

東西回廊を議論するに際して、考古関連資料は重要な研究資源のひとつである。まず、ミャンマーの遺跡リストでは、ビルマ政府が1916年に刊行した前掲の”List of Ancient Monuments in Burma”が重要な資料のひとつである。内容は、432箇所の遺跡リストが含まれる。本研究では、東西回廊の議論に関係する箇所のみをタイ全土遺跡リストと共にマッピングした。

つぎに、タイ全土遺跡リストについてである。筆者は、2012年LARPプロジェクトからタイ国文化省芸術局作成のタイ国全土の遺跡データを集成したリスト約7,400箇所を入手した。タイ国文化省芸術局におけるタイ国内の遺跡調査や分析は、約100年前から始まり、現在約8,600箇所の遺跡が把握されているが、その約半数の遺跡についての歴史的根拠や意味づけは明白になっていない。初めて入手したタイ国全土の遺跡リスト集成は、地理空間を基本に時間軸に沿って分析されることで、また各遺跡の歴史的意義付けや特徴の分析が

進められるなら、従来からの学説との検討、新たな知見を得る機会を与え、タイ史研究の進捗に大きく貢献するものと期待される。

本研究では、この遺跡データの GIS 分析を行って、(a)先史時代から現在のラッタナーコーシン期までの地理空間と時間軸に沿った白地図上への遺跡をプロットする遺跡マッピングを行い、全体を俯瞰した。(b) 特に、ドヴァーラヴァティー、アンコール期、スコタイ期、アユタヤ期のマッピングにもとづいて、東西回廊の視点から地域間の関係性やネットワークの特性を把握した。

(2) タイ全土の遺跡データ分析

本遺跡データは、北・東北・東・南タイの区分に分けられ、データ件数は総数 8,499 遺跡である。遺跡によってはスコタイ期の遺跡がアユタヤ期に引き継がれ、新たな仏塔や建築物が付置され、現在まで継承される遺跡がある。これらの遺跡群はデータ分析過程で約 1,200 遺跡以上あることが判明している。一意な遺跡は約 5,780 箇所になる。また、本遺跡データは遺構のみならず、碑文や遺物が発見された場所、仏像や建築物など構造物の歴史的遺産が存在する場所を含む。

単純な遺跡マッピングの結果は、図 1 に示すとおりで、それぞれの時代の特徴を示す広範囲な領域での分布がみられる。以下の節では、特にドヴァーラヴァティー、アンコールを含むロブリー、スコタイ、アユタヤの各時代について、容易な理解を期待することから、当該時代の分布を個別に示す。

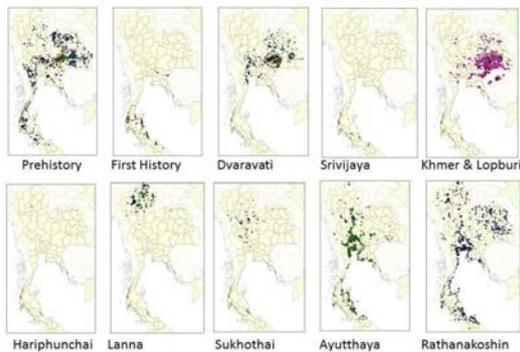


図 1 タイ遺跡時代別分布

(3) ドヴァーラヴァティーについて

ドヴァーラヴァティーに関連する遺跡のマッピングを見てみる。遺跡リストに出現する最西北端の遺跡は、カンペンペット (Kamphaeng Phet) 県バンクロンムアン (Baan Klong Muang) と呼ばれる古代の運河の街である。最南端の街はペチャブリー県に集中している。一方、タイ湾東沿岸にあたるチョンブリー県ムアンボラーンに至る。また、ドヴァーラヴァティー期の都市は東北タイ全土に拡がり、主にナコンラーチャシマーやブリラムを中心にムン川やチー川に沿って総数 682 遺跡が分布している。

東西回廊という視点で結果をみると、ナコンラーチャシマーからシーテープを経てピ

ット県に至るルート、同じくナコンラーチャシマーからナコンナヨックを経てロブリーに至るルートとプレーンブリー県のシーマホーソットからチョンブリーに至るルートが見える。一方、前述のチャオプラヤー流域を中心にして、ペチャブリーからナコンパトム、ナコンサワン、カンペンペットに至る南北回廊が見えるが、この地域にはナコンラーチャシマー県やブリラム県と同様に多くの都市が集中していることが判る。

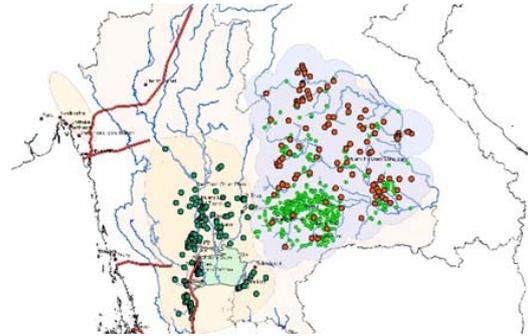


図 2 ドヴァーラヴァティー期の遺跡分布

一方、ドヴァーラヴァティー期のミャンマー中部沿岸域に近いタトーンやペグー附近のモン族による遺跡は、これまでは明らかでなかった。最近の考古学的研究からその実態が明らかになりつつある。モン族による遺跡は、サンパナゴ、モウタマ、タトーン、ドンウン、ウィンカ、エイヤサマー、バゴーであり、「黄金の土地」に関係する。まず、9 世紀から 11 世紀モン王国が形成されたタトンから南方約 35 キロメートル、マルタバンからサルウィン川に沿って北方約 15 キロメートルの西岸に位置するサンパナゴは、交易路として注目される。河川沿いで微高地に位置するが、タイ国のドヴァーラヴァティー期におけるクープアやウートンに位置した港市の環濠都市の形状と近似している。発掘された装飾品の遺物であるビーズや象形の素焼きは、サンパナゴ近くのウィンカのような構造をもつ煉瓦建て構造物とともにそれらに共通している。その特徴は、微高地と平原という地形的な特徴はことなるもののタイのランパンやプレーの遺跡に同様の特徴がみられ、ミャンマーにおけるモウタマ、タトーン、ドンウン、ウィンカ、エイヤサマー、バゴーに共通している。

図 2 は、ドヴァーラヴァティー期の遺跡分布を示す。図 2 の左側が、「法輪」を象徴とする東モン族の古代都市群である。同右側がセーマー文化を特徴にする東モン族の古代都市群とセーマー分布である。

(4) アンコール期の遺跡分布

タイ国内の最北端のクメール様式の遺跡は、スコタイ県シーサッチャナーライ、旧チャリエン) に 2 遺跡がある。一つは、ワットチャオチャン (Wat Chao Chan) であり、もうひとつはワットプラシーラッタナーマハタート・チャリアン (Wat Phrasi Ratthana

Mahathat Chaliang) である。ワットチャオチャンのすぐ北側には有名な陶磁器の産地がある。一方、最西端はカンチャナブリー県にあるムアンシンである。また、マレー半島沿いの最南端はペチャブリー県にあるプラサート・カンペン・ラエン、タイ湾東沿岸に沿った最南端ではチャンタナブリー県のワットトーントゥア (Wat Thong Thua) およびすぐ北側のムアン・パニアット (Mueang Phaniat) にはラテライトによる遺構が見られる。

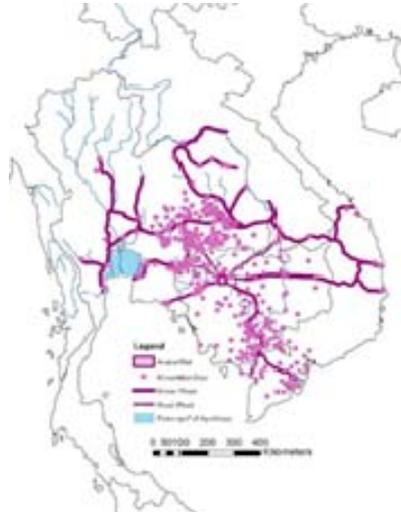


図3 アンコール期の回廊推定

東西回廊の視点からマッピングされた結果をみる。王道の西(A)ルートは、タイ・カンボジア国境アランヤプラテート近くのサドック・コック・トムに至るが、タイ国内に入り、プラーチンブリー県からチャチュンサオ県、チョンブリー県に至る。王道のアンコールからピマイに至る北西 (B) ルートは、ナコンラーチャシマー県からペチャブーン県シーテープとロップブリー県に分かれ、前者はピサノロックからスコータイに至ったと考えられる。後者のロップブリーはチャオプラヤー流域西側のスパンブリー、カンチャナブリーおよび南部のペチャブリーに繋がっていると考えてよい。そのナコンラーチャシマー県における北西 (B) ルートの分岐点は、どこに位置していたか。筆者らのフィールド調査(2012年12月23日)で、ナコンラーチャシマー県とロップブリー県の県境にあるチャイバンダンの Sap Tha Khian と呼ばれる邑の近くでアユタヤ軍部隊のキャンプ地と碑文が発見されている(緯度:15.09468, 経度:101.40156)ことを把握した。時代が異なるが、おそらく関係があったのではないかと考えられる。

図3に、アンコール期の回廊推定を示す。

(5)スコータイ期の遺跡分布

スコータイ朝は13世紀から15世紀前半にかけてヨム (Yom) 川上流域のスコータイやシーサッチャーナーライに勃興した最初のシャム人の王朝である。そのスコータイ期の地名はタイ遺跡リストから関連するデータを抽出してみると203箇所になる。そのマッピング結果を図4に示す。最北端はナンにある Wat Phra That Chae Haeng やランパーンの

Wat Phra That Sadet にあたる。最南端では、ナコンシータマラートから南方へ約130キロメートルに位置するパタルン県の Wat Phra Koed の遺跡である。特に中心は、スコータイ、カンペンペット、ピサノロックに分布している。最東端は、ノンカーイの Wat Sri Muang、チャイヤプームの Ku Phra Buddha 碑文がある Wat Chedi になる。



図4 スコータイ期の回廊推定

(6)アユタヤ期の遺跡分布

遺跡リストから、アユタヤ朝の最北端はチェンラーイ、北西にはターク、西端ではカンチャナブリー、最南端ではパタニー (Pattani)、北東端ではルーイ、東端ではシーサケット、東南端ではトラットに至るまで分布している。

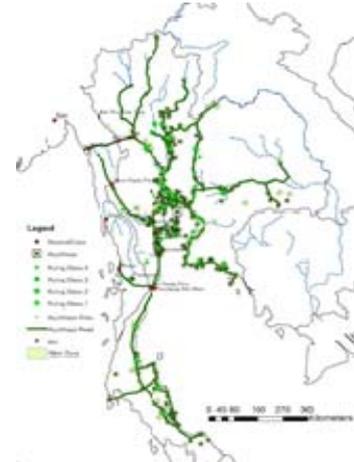


図5 アユタヤ期の回廊推定

特に、チョンブリーからラヨン、チャンタブリーのタイ湾東沿岸ではアユタヤ朝と考えられる遺物が海底から発見されているが、歴史的解明までには至っていない。マッピングの結果は、14世紀中頃から16世紀中頃に至る200年間に、北は雲南省南部から南はマレー半島に至り、東はメコン河沿岸から西はサルウィン川流域に至る広大な地域に勢力を発展した[石井1998]の説を裏付けている。図5に、アユタヤ期の回廊推定を示す。

(7)結論

東西回廊という定義と概念が初めてもちいられたのは、石井米雄による論文「スコータイを通過する「東西回廊」に関する覚え書き」[引用文献①]であった。この論文は、特に交易や仏教の伝播に焦点をあて、スコータイ期の (b) ムアン・ヌア (北方諸国) と西側諸国との交易・交流におけるマルタバン、モールメイ

ン、メーソット、ターク、スコータイのルート
を東西回廊と定義したのである。しかし、
その交易・交流に関する議論は、『タイ近世史
序説』[石井 1998]の中で、特にアユタヤ期の
交易品や関係諸国との関連を事例にしなが
ら、4つのルートとして説明されている。(1)モ
ールメイン・ターク・ルート、(2)タポイ・カン
チャナブリー・ルート、(3)テナセリム・ペ
ブリー・ルート(4)プーケット・ナコーンシー
タマラート・ルートの4経路である。本論考
では、新たにタイ国文化省芸術局によるタイ全
土遺跡リストおよびミャンマーの遺跡リスト
や考古関連文献、スコータイ碑文に出現する
地名軍事関連資料、英領当時の民族学的調査
記録などにもとづき、時間(歴史)軸を基準
にしながら空間的なマッピングを行うことで、
ドヴァーラヴァティー期からアユタヤ期に至
る統治・支配、交易、仏教文化の伝播、軍事
における経路に注目して東西回廊を俯瞰した。
そして、石井説では語られなかった事例の補
完と新たな展開を試みたのである。

新たな資料群から、ドヴァーラヴァティー期
からアユタヤ期を通じて交易・交流に関係し
た(1)ルート、スコータイ及びアユタヤ期にみ
られる(3)ルートの特徴が明らかになった。ま
た、前述の4つのルートに出現しなかった新
たなルートが浮き彫りになった。ひとつは、
ミャンマーのタトーンからバーン・ター・ソ
ンヤン峠を越えて北方諸国に至るルートであ
る。スコータイ期のことである。もうひとつ
は、モールミヤンから三仏搭峠を経て、カン
チャナブリーに至るルートである。アユタヤ
期以降と考えられる。しかし、石井が示した(2)
ルートの仮説については、軍事関連資料を除
いてスコータイ期前後の具体的なルートに関
する根拠は得られなかった。タイの古絵図に
記載されていることから、事実本ルートが存
在したと考えられるが、ミャンマー側の資料
をも閲覧しながら根拠を探る必要がある。ま
た、同じく(4)ルートはミャンマーとタイの関
係を探る目的からは外れるために本論考では
対象としなかった。

以上の結果から、すべての時代を通じて石
井が示した4つの経路は、時代によって異な
る様相を示すことがより鮮明になった。ド
ヴァーラヴァティー期における上座仏教の伝
播、スコータイ期における仏教文化の伝播と
外交ルート、アユタヤ期における港市国家
としての交易とビルマ・アユタヤ抗争にお
けるルートであり、新たなルートが発見でき
たことである。北タイにおけるランナー王
国、東北タイにおけるランサーン王国との
関係では、スコータイ期において支配領
域の境界が存在したような結果も見えるが、
その分析は今後の課題としたい。

<引用文献>

① 石井米雄 2009「スコータイを通過する「東
西回廊」に関する覚書」『東南アジア—歴
史と文化』東南アジア学会誌。

② 伊東利勝 1994「10世紀前タトーン地域の
文化変容」『愛大史学』No.3, pp.53-102.

③ 新田栄治 2013「東南アジアの都市形成と
その前提—ドヴァーラヴァティーを中心
に—」『鹿児島大学法文学部紀要』第78
号, pp.29-52.

④ Indrawooth, Phasook. 2004. Dvaravati:
Early Buddhist Kingdom in Central Thailand.
*In Thailand: Southeast Asia - From
Prehistory to History*, edited by Ian Glover
and Peter Bellwood, pp.37-64. London:
RoutledgeCurzon.

⑤ Burma 1916: Govt. BURMA. 1916. List of
Ancient Monuments in Burma, Office of the
Superintendent, Govt. Printing.

⑥ Sampaongem 2012: Sampaongem, Pongdhan.
2012. 『タイ全土遺跡リスト』(未公開。
所蔵権 LARP プロジェクト)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6件)

① Mamoru Shibayama, An Examination of the
East-West Cultural Corridor, *SPAFA Journal*,
査読有, pp.113-120, 2015.
<http://www.seameo-spafa.org/>

② 柴山 守、地域情報学—地域分析への新た
な挑戦、東南アジア研究、50周年記念誌、
pp.112-114、2015.
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

③ Mamoru Shibayama, Overview East-West
Cultural Corridor Project on Southern Coastal
Zone in Myanmar with the Borderland in
Thailand, *Progress Report of National
Research Council of Thailand*, pp.3-5, No.1,
2014.
<http://en.nrct.go.th/en/>

④ Mamoru Shibayama, Medieval East-West
Corridor in Mainland Southeast Asia,
Advancing Southeast Asian Archaeology 2013,
SEAMEO SPAFA, pp.423-431, 2015.
<http://www.seameo-spafa.org/>

⑤ 伊東利勝、18世紀エーヤーワディー中流
域世界における異人のイメージ、『愛大史
学—日本史学・世界史学・地理学—』、No.25、
pp.29-78, 2016.
<http://ci.nii.ac.jp/ncid/AN10378581/>

⑥ 伊東利勝、オウタマ僧正と永井行慈上人—
『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』ア
ジア遊学、No.196, pp.127-142, 2016.

http://bensei.jp/index.php?main_page=index
&cPath=17/

[学会発表] (計 7件)

- ① Mamoru Shibayama, "Interdisciplinary Research and Area Studies on Sustainable Development", Keynote Lecture, Proceedings of International Conference on Interdisciplinary Research and Studies on Sustainable Development 2014, Kamphaeng Phet Rajabhat University in Collaboration with the Graduate Northern Rajabhat University Network (GNRU), Kamphaeng Phet Rajabhat University, 5 August 2014.
- ② Mamoru Shibayama: A Study on the East-West Civilization Corridor under the EWCC Project, Proceedings of Si Thep Historical Park International Seminar on Cultural Relationship in Mainland Southeast Asia, Si Thep Historical Park, Thailand, 22-23th August, 2014.
- ③ Mamoru Shibayama and Im Sokrithy : The East-West Cultural Corridors Project, Proceedings of Connectivity in Southeast Asia on Southeast Asia Seminar 2014, Siem Reap, Cambodia, November 2014. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- ④ Mamoru Shibayama: The East-West Cultural Corridor between Myanmar and Thailand, Proceedings of ANGIS and CRMA Bangkok Meeting 2015, The Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok, Thailand, 5-6th, January 2015.
- ⑤ Mamoru Shibayama, Medieval East-West Cultural Corridor in Mainland Southeast Asia, IWASTCS2015: International Workshop on Application of Science and Technology for Cultural Studies, 13th-14th November 2015.
- ⑥ Mamoru Shibayama, The Medieval East-West Corridor - Mapping Heritages on Archaeo-Ontology -, International Conference on Early State and Cultural Relationship of Mainland Southeast Asia, 12-13th, November 2016, CRMA Research Center, Thailand.
- ⑦ Mamoru Shibayama, East-West Corridor: Mapping Cultural Heritages Myanmar and Thailand, The 2nd SEAMEO Spafa International Conference on Southeast Asian Archaeology, 20-30th June 2016, Bangkok, Thailand.

[図書] (計 1件) (印刷中)

- ① Mamoru Shibayama Ed at al, *Medieval*

East-West Cultural Corridor in Mainland Southeast Asia, Geo-informatics International, 300pages, 2017 (July, 2017)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：平成 年 月 日
国内外の別：

○取得状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：平成 年 月 日
取得年月日：平成 年 月 日
国内外の別：

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

柴山 守 (SHIBAYAMA, Mamoru) 京都大学・国際戦略本部・研究員
研究者番号：10162645

(2)研究分担者

田代亜紀子 (TASHIRO, Akiko) 北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：50443148

杉山 洋 (SUGIYAMA, Hiroshi) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・副所長

研究者番号：50150066

伊東利勝 (ITO, Toshikatsu) 愛知大学・文学部・教授

研究者番号：60148228

丸井雅子 (MARUI, Masako) 上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：90365693

(3)連携研究者

石澤良昭 (ISHIZAWA, Yoshiaki) 上智大学・アジア文化研究所・教授

研究者番号：10124851